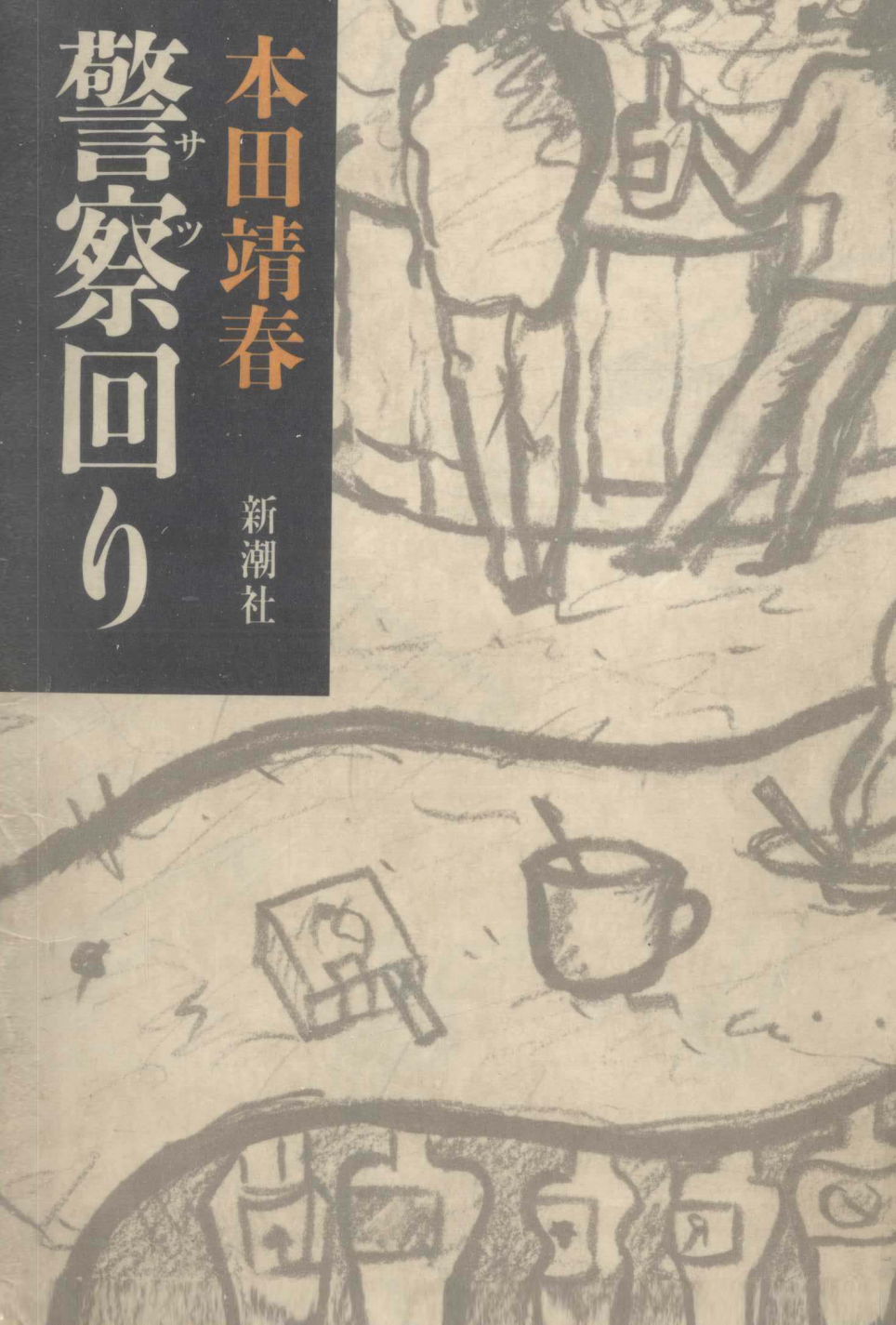
警察（サツ）回り

本田靖春

新潮社



警察（サツ）回り

本田靖春

新潮社

警察回り（サツまわり）

著者　本田靖春（ほんだやすはる）

一九八六年　九月二〇日　発行
一九八六年一〇月二〇日　二刷

発行者　佐藤亮一

印刷所　二光印刷株式会社　製本所　株式会社大進堂

発行所　郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地
株式会社　新潮社

電話　業務〇三(266)五一一一　編集〇三(266)五四一一

定価　一二〇〇円　振替　東京四―八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Yasuharu Honda Printed in Japan. 1986

ISBN4-10-363501-0 C0093

目次

第一章　バアさんの回想録……5
第二章　警察回り無頼……59
第三章　「東京の素顔」……107
第四章　〝黄色い血〟キャンペーン……141
第五章　深代惇郎の死……207
第六章　バアさんの血……265

装幀／大月雄二郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

警察(サツ)回り

第一章　バアさんの回想録

1

バアさんが死んだ。

最期となった昭和六十年十月一日、臨終に立ち会った肉親は一人もいない。そうなることは、二年前、バアさんが最終的に故国を捨てたときから予想されていた。とはいうものの、満六十四年に二カ月と一週間が欠ける生涯を通じて、いいことがほとんどなかった彼女の軌跡を思い浮かべるとき、哀れがひとしお胸に滲みる。

ガン再発の疑いでバアさんが東京・下谷のS病院に入院したのは、同じ年の三月六日のことである。その直前、彼女は私に宛てて遺言状を書いている。

〈私事　新井素子にもし万が一の場合は、葬儀はもちろんの事、一切の処理をお願い致します。財産は一つもない私なので只煩しい事だけ残ります。本当に申し訳ありませんが、呉々もよろしく。

まともな家財道具はなく生活必需品ばかりなので、さぞかし面倒臭い事ばかりと思います。細々した事は面識のあります御婦人達（東先生、隈部夫人、高木夫人）と御相談の上で処分して下さい。その中で友人達が何か記念にしたいものがありましたら、是非お持ちいただいて下さい。

知らせるべき方々の住所は次の通りです。
（以下略）

昭和六十年二月二十八日

新井素子㊞〉

右の遺言状に基いて、私はバアさんの葬儀を取り仕切り、四十九日にかわる会も済ませて、遺骨を空路、彼女の生まれ故郷へ届けた。生前、彼女が好んで口にしていた言葉をそのまま用いると、これも何かの因縁、である。忙しい身で通夜や葬儀の手助けをしてくれた私の警察回り時代の仲間も、似たような縁で彼女と結ばれていたということになろうか。

私の主たる出番はバアさんが息を引き取ってからで、つとめた役割りは、遺言状の中に名前が出てくる婦人たちのそれにくらべると、何ほどのこともない。

なかでも、バアさんの恩師にあたる東先生の献身ぶりには、頭が下がるばかりであった。

彼女は隈部夫人を初めかつての教え子たちを糾合して、バアさんの入院から最期にいたるまでの七カ月間、だれかが最低一人は付き添っているようにローテーションを組み、一日も欠かさずバアさんの身辺の世話をした。

そうした態勢づくりを含め、バアさんに関わる事柄の一切が、東先生の采配によって、何の遺漏もなく処理された。

その分だけ、東先生の払った犠牲は大きい。彼女は前記の七カ月間に、まるまる八十五日をバアさんのために潰した。その結果、準備を進めていた新規の仕事の開業を、無期延期せざるを得ない羽目になった。

親身も及ばぬ、というのは、手垢のついた表現であるが、東先生の献身ぶりはまさにそれであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

だれにでもできることではない。接していて、私は深い感銘を受けた。
かりに、東先生を中心とする婦人たちがついていなかったとしたら、バアさんの人生の終わりは孤独そのもので、ひどく惨めなかたちになっていたに違いない。そのあたりのことが、当の本人にどこまでわかっていたものか——。
入院の初期、彼女は婦人たちに向かって、こんなことをよくいっていた。
「迷惑かけるけど、いまあなた方は前世で私に世話になったお返しをしてるのよ。来世はまた私の番だわ。きっとこのお返しをするからね」
バアさんにしてみれば、それで、感謝の気持ちを表したつもりであったろう。しかし、はたで聞いていると、彼女の解釈になる因縁論は、現世にある自分自身に都合よくできすぎているようにも思えた。
それが度重なるので、ついにバアさんは東先生にたしなめられた。
「新井さん、あなたは来世、来世っていうけれども、今度また人間に生まれてくるとはかぎらないでしょう。もし虫けらにでも生まれたらどうするの。あなたの場合、その可能性は大ありだと思うわ。そのときのことも考えておかなくっちゃね」
お断わりしておくが、東先生というのは仮名である。この稿の執筆にあたって、ご本人から手紙で次のような申し出を受けた。
〈新井さんとの関連で、私のことが御作品の中に出るのは致し方ございませんが、私は自分の死後、いかなる形でも自分の存在が残るのを好みません。跡形なく消滅するのが理想です。この点は新井さんとまったく反対なのです。彼女は、自分が生きたことの証(あかし)を残したい、と常々いっていましたから。
そのような次第ですので、私が実名で登場するのはどうかご勘弁下さい。読む人が読めばそれが私

であるとわかるのは、少しもかまいません。不特定の読者にまで知られるのはおぞましく思います。どうか私のこの気持ちをご理解のうえご善処下さいますようお願い申し上げます〉

私たちかつての警察回り連中をしばしば呼び捨てにして憚らなかったバアさんが、友人・知己の中で「先生」をつけて立てていたのは、東先生の他にもう一人、後に登場する長戸路弁護士だけである。私たちは彼を「トロさん」とくだけた調子で呼んでいるが、東先生に対してはあくまでも東先生である。バアさんにならってのことであるが、この女性には接する人をしておのずから敬意を抱かしめる凜乎としたものが身に備わっている。

それは、思うに、極限状況かそれに近い数々の局面をくぐった、少女期における敗戦体験に根ざしているのであろう。

昭和五年に旧満洲（中国東北部）の大連で生まれた東先生は、小学校を終えたあと安東（丹東）へ移ったが、女学校四年のとき敗戦を迎えて、やって来た人民解放軍に看護婦の要員として徴用され、家族とは離れ離れになって後方病院を転々とする。一時は国民党軍に押された解放軍とともに鴨緑江を渡り、朝鮮に逃げ込んだこともあったという。

昭和二十七年十月、ようやく内地へ引き揚げて来たが、先に帰国して都内に居を構えていた家族のもとへは寄ることができず、東京駅からまっすぐ国立中野療養所に直行、入院した。重度の結核に冒されていたからである。

左の肋骨を七本もとる手術を受けて、療養生活を続けるあいだ、倉石武四郎東大教授によるＮＨＫラジオ中国語講座を聴いて実地で身につけた中国語に磨きをかけた。昭和三十年に退院、翌年、文通で目をかけられていた倉石氏の誘いで、日中友好協会（準備会）の文化事業の一環として発足した倉石中国語講習会（日中学院の前身）に加わって本格的な学習を積み、やがて講師に取り立てられた。

昭和三十八年十月、彼女が担当する「家庭婦人のための中国語講座」に、中国語の通訳の資格をとろうと志したバアさんが受講者の一人として参加した。これが二人の出会いである。

バアさんは昭和四十年九月、銀座の三笠会館本店が改築を機に新設した四階中華料理部「泰山」のフロア・マネジャーに採用された。それと同時に通訳への道を放棄し、講座から退いてしまうのだが、東先生とは自ら進んで接触を重ね、いつしか家庭の中にまで入り込んで、例年、元旦を東家で祝うのが習いとなった。

バアさんが東先生と親しく口をきくようになったそもそもは、まだ講座に籍を置いていたころ、彼女が幹事役をつとめるクラスの旅行会が台風で流れて、その事後処理のため一緒に銀座の旅行社へ出向いたとき――と、生前、本人はいっていたが、東先生にはそうした記憶がまったくないという。つまり、そのころのバアさんは、きわめて印象の薄い受講者だったのである。

「家庭婦人のための中国語講座」は昭和四十二年五月、中国文化大革命の影響を受けた日中友好協会の内部分裂のあおりで解散する。東先生はその年の九月から池袋の豊島区振興会館で独自に「中国語勉強会」を主宰した。バアさんはこれには参加しなかったが、会費は送り続けた。

そのようなかたちをとりながら、東先生との間柄を通りいっぺんの師弟関係に終わらせなかったところに、バアさんの面目がある。

彼女は、だれが自分にとって得になり損になるかを見極めるに、動物的嗅覚ともいうべき能力を備えていて、見事なほど選択を過たず、これはと見込んだ相手には積極的に近づき、いったんつかまえたら絶対にはなさなかった――とは他ならぬ東先生の見立てだが、さしずめトロさんのケースなども、代表的な一つといえるであろう。

昭和三十六年、バアさんは自分でやっていた小さなバーを立ち退き問題のごたごたで閉めるのだが、そのとき私たちの仲間の一人が中学校時代からの親友である弁護士を彼女に紹介してやった。それが

トロさんで、彼は相手方の弁護士とやり合って、バアさんがしばらくは働かなくてもいいだけのものを引き出すが、報酬は受け取らなかった。

その一件があってからトロさんは、彼女によって一方的に任命された無料顧問弁護士、という恰好になった。

バアさんが盆暮れの挨拶を欠かさなかったのは殊勝だが、何かにつけトロさんのもとに相談事を持ち込んだ。その一方、彼を「トロ先生」と呼んで、いかに心安い間柄にあるかを周囲に吹聴した。彼女は、そうすることで、自分を実際より大きく見せようとしていた節がある。

バアさんが培った人脈は各層に及んでいた。ちなみに、四十九日にかわる会には、七十五人もの出席者があった。これは、私が予想もしない数であった。改めて彼女が人間関係の開拓と育成に注いだエネルギーを思い知らされた。

バアさんには、これといった学歴も特技もなく、身寄りがないから引きもない。財産といえるのは人間関係だけであった。

彼女は、東先生のいう動物的嗅覚に近い人物鑑定能力に加えて、たぐいまれな親和力に恵まれていた。知り合った相手がだれであろうと、物怖じなどせず、たちまちのうちに懐深く入り込んでしまう。もっとも、その人物が彼女の眼鏡にかなえばの話であるが。

そういうふうだから、人との付き合いの面で押しつけがましく、無遠慮なところがあった。そのために、彼女に見込まれた人たちは、大なり小なり迷惑を蒙った。

いい例が長電話である。その最大の被害者が東先生であった。

バアさんは夜な夜な、東先生の家に電話をかけてよこした。そんなにいつも用件があるわけではない。その日、自分の周辺にあったよしなしごとを、細大もらさず報告するのである。それは彼女の日課になっていて、入院するまで続いたという。

バアさんにとって東先生は九つ年下であるにもかかわらず、精神的な支えであり、生きていくうえで指標を与えてくれる、文字通りの人生の師であった。

私は何に当たるのか。ともかくバアさんの長電話に悩まされた一人ではある。

深夜、ときならぬベルの音に、何事かと受話器を取り上げると、特徴のある甲高(かんだか)い声がいやでも耳元に響く。

「バアさんです。お元気？」

非常識な時間帯にこれといった用もなく電話をよこして、「すいません」でも「ごめんなさい」でもない。

「いったい何時だと思ってるんだ」

当方、つい突っけんどんな受け答えになってしまうが、それでひるむようなバアさんではない。

「あら、随分じゃございませんこと」

他人のことには無頓着なバアさんが珍しくこちらの不機嫌を察して、冗談めかしていっているのはわかるが、身にそぐわない言葉遣いを彼女独特のイントネーションでやられると、なおのこと腹が立つ。

「オレがいくらヤクザな商売だからっていっても、時間というものがあるだろう」

とたんに彼女は、ふだんの調子に戻って開き直る。

「何いってんのよ。バアさん、このクソ寒い中を、いま店から帰って来たばかりなんだから。そういう言い方しなくたっていいじゃないの。トサカにくるよ」

こうしたがさつな言葉遣いは、私たちかつての警察(サツ)回り仲間が若かったころの口移しであるのだが、これではまるで、この私が自分の都合で彼女を深夜までこき使っているかのような物言いではないか。

晩年のバアさんは、千葉県柏市の小さな中華料理店で働きながら、松戸市の一間のアパートで独り暮らしをしていて、彼女が私に電話をよこすのは、翌日は仕事が休みという日が多かった。一度、彼女に気分よく喋らせたらどのくらい続くものかと、ふだんは極力控え目にしている相槌を適当に打ちながら時計をにらんでいたら、延々、三時間半にも及んだ。

バアさんのお喋りも、自分の近況報告にとどまればよいのだが、舌好調の赴くところ他人の噂話へと発展する。だいたいが慎しみとは無縁の女性なのである。

噂話に登場する多くは、私がただの一度も会ったことのない人たちで、当方、何の興味もないのに、バアさんの交遊範囲内にある主要な人物に関して、その経歴から性質、性向、家族関係、仕事の内容、資産状態など、ほぼすべてにわたって通じてしまうことになる。

わが家では、ある時期からバアさんの電話があると、三度に二度といった割合で、家人が聞き役をつとめるようになった。私の原稿書きに支障をきたす場面がままあったからである。そういうときは当然、居留守を使った。

そうこうするうち、バアさんは私が在宅かどうかを確かめもせず、いきなり家人を相手にお喋りを始めるようになった。

私には息子と娘が一人ずつあって、いまではともに成人して別に住んでいるが、二人がまだ小学校に通っていたころ、家人が夕食の仕度をしているさ中、バアさんからの電話がかかった。

下の娘はともかく、息子のほうは三度の食事が待ち切れない食べ盛りだったので、家人はコードを引きずって電話機を台所へ持ち込み、バアさんのお相手をつとめるかたわら片手でやりかけの調理を済ませ、目とアゴで子供たちに食器出しなどの指図をして、夕食を与えた。二人が無言のまま食事を終えて塾へ出掛け、帰って来て入浴し、午後十時と定められた就寝時間になって、自分たちの部屋からおやすみをいいに来たところ、家人がまだ受話器を手にしていたので、息子のほうがさすがにあき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com